認識の魔術

―― F. X. v. バアダーの力動論的認識論について ――

能　木　敬　次

序

J. カント（1724－1804）は、われわれの世界認識は悟性による現象認知に限定されており、「物自体」（Ding an sich）は人間には不可知であるとした[1)]。またその際、主体の世界に対する態度は「無関心」（indifferent）、「無関与」（affektlos）でなければならないとした[2)]。これはこれまで J. ロック（1632－1704）やバークリー（1685－1753）、D. ヒューム（1711－76）を中心とするイギリス経験論の思想家たちによって闘われた事物認識に関する実在論と観念論の長大な議論を調停する画期的な方法論であった。彼はまず「われわれが物質について知っているものはその関係だけである」とし、実在論をきっぱりと切り捨てる[3)]。その上で「空間」と「時間」という直観形式に経験的実在性を持たせる。「経験の対象がなかったら、空間も時間もまったく意義をもたなくなるであろう。」「それゆえ、経験が可能であるということは、つまりわれわれの一切のア・プリオリな認識に客観的実在性を与えるということなのである。」[4)]彼は一種逆説的な方法で経験的認識の客観的実在性を導出している。つまり、認識の器としてア・プリオリにわれわれに与えられた空間と時間の概念の合目的必然性を強調することによって、経験認識の客観的実在性を要請するのである。それを突破口としてカントは三批判書を初めとするその膨大な認識論哲学を発展させてゆく。

カントの観念論哲学が同時代の全ての知識人に重大な影響を与え、その後

200年以上に亘って哲学的思考の方向性に決定的な役割を果たしてきたことはここで詳述するまでもない。18世紀末から19世紀にかけてカント哲学がドイツの思想界に与えた影響は「深刻な」という表現をとっても過言ではないであろう。どんな思想家・詩人もカントの所謂「事物不可知説」の洗礼を受けなければならなかった。用意周到で、心理的な意味では老獪とも言えなくもないこの総合理論と真っ向から対決するにせよ、それとも完全に無きものとして当初より自己の視野から外すにせよ、それ相応の理論構築か強力な思想的処方を用意しておかなければならなかった。どちらにせよ、当時の精神は「事物不可知説」に対して一定の解決を得なければ一歩たりとも先へ進むことは出来なかった。

J. W. v. ゲーテ（1749－1832）は自己の長年の植物研究の立脚点とカント哲学の精神が同じものであることを積極的に認めながら、自分の著作に対してカントの側から何の反応も示されないのを残念がっている[5]。F. シラー（1759－1805）がカント哲学に深く沈潜していたことや『カリアス書簡』（*Kallias oder über die Schönheit*, 1793）に窺える彼の美学がまさしくカント哲学の揺籃から生まれ育ったものであることは周知のとおりである。彼の論文・著作のいくつかはカント哲学との対決の直接的な所産である。ドイツ・ロマン派の詩人や作家たち、彼らは例外なくゲーテのエピゴーネンであったが、彼らもまた「事物不可知説」に起因する所謂「カント・ショック」によって詩人として生まれながらにして傷を負っていた。

H. クライスト（1777－1811）はその作品群の中で「錯覚」・「取り間違い」といったモチーフを多用している。『アンフィトリオン』（*Ampytryon*, 1807）や『壊れ甕』（*Der zerbrochene Krug*, 1811）など、作品によってはこれが作品唯一の、もしくは中心テーマとさえなっているものもある。このモチーフはもともとスペイン・バロック演劇に由来するものであるが、クライストはそれをカント哲学から獲得した自己同一性の問題へと深化させて作品の中に折り込んでいる。カントの実在論への懐疑を逆手にとって、神秘主義的な観念論的抒情の世界を開いたノヴァーリス（1772－1801）のような詩人もいる。

彼は言う、「世界は精神の宇宙的な比喩・象徴的形姿である。」「植物は人間による植物的意味づけに影響を与えるのと同じように、動物は動物的意味づけに、石は石の意味づけに影響を与える。」[6]ここでは主観としての精神の神秘化・絶対化が図られている。精神の営みを妨げるものは何もない。

カント哲学の観念性は J. G. フィヒテ（1762－1814）の『全知識学』（*Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*, 1794）を経て F. W. J. v. シェリング（1775－1854）の同一哲学によって一つの完成をみた。フィヒテはカントの物自体という概念そのものをも否定する。主観性と客観性の双方を同時に含み持つ自我が非自我としての世界を自己に対して定立し、つまり自我を非我によって制限することによって自我は非我と同化し、絶対自我（Das absolute Ich）として新たに実現される。フィヒテ哲学によって主観としての自我は、事物世界としての客観をも含み持つに至る。シェリングの思想は神秘主義の色彩を帯びる。彼によれば、フィヒテの自我と非我の対立は無制限者（Das Unbedingte）としての自然の両極にすぎない。この条件や限界をもたない神的な自然の二極性から精神と自然、意識と対象、主観と客観、自我と非我の区別が出てきたが、本来は同一の世界の単なる二つの極にすぎない、そう彼は主張する。

このように、フィヒテ・シェリングによってドイツ観念論はカントの思惑とは異なった深化の様相を示すに至るが、それは主観の可能性の絶対化、及び一種、神秘主義の性格を帯びる。一方、フィヒテやシェリングとは違った角度でカントの観念論的な展開と真っ向から立ち向かった者がいる。F. X. v. バアダー（1765－1841）である。彼はシェリングと長年、深い親交にあり、彼らの思想は相互の影響関係にあった。シェリングは主客の認識論的な立場を堅持しながらも、主客の相違の消滅・同一化へと進んでいったのに対して、バアダーは主体の側からの客体の支配といった構図を認識論の中に持ち込みながら、古代ユダヤの思想へと接近していった。バアダーは特にカントの趣味判断に示された、純粋認識の理論展開に異議を唱えた。本論の目的はカントの認識論とは対極的な位置にあるバアダーの力動論的認識論、及び彼の思

想の当時の思想、特にシェリングを代表とするロマン派の思想との影響関係について論究することにある。

１．バアダーの「段階的認識論」

カントは『判断力批判』（1781）で純粋な趣味判断、つまり美学的判断において認識主体は対象に対して関心を持つことはない、またその感情・感覚は対象から何ら影響を受けない、とした。

> およそ関心は趣味判断を損ないその公正を失わせるものである、とりわけ趣味判断が理性の関心のように合目的性を快（Wohlgefühl）の感情よりも前におくのではなくて、逆に快の感情を合目的性の基礎とするような場合はなおさらである。（　中略　）要するに感覚的刺激や感動が（たとえかかるものが美に関する適意（Wohlgefallen）と結びつくにせよ）、いささかも影響を及ぼさないような趣味判断、従ってまた形式の合目的性だけを規定根拠とするような趣味判断が、即ち*純粋な趣味判断*である[6]。

カントは、純粋な美学的な判断は「対象の美」、「対象を表象する仕方の美」に関わるものであり、それ故その判断は非経験的・形式的な判断であるとした。その現実的特性は、それがあらゆる関心（Interesse）から解き放たれていることにある。言いかえれば、感覚的刺激（Reiz）や感動（Rührung）によって afficieren（触発する、影響をあたえる）されることはない。

一方、バアダー（ママ）はカントの美学判断における無関心・無感動の要素に疑問を呈する。そもそも認識する主体も認識される客体も同じ世界に存在するのに、その活動がまったく他者の影響を受けないことが可能であるはずはない、彼はそう批判する。

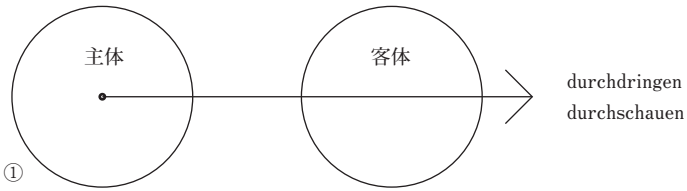
認識能力のそのような使用（認識能力は真の感動にあっては、認識者の生の機能（Lebensfunction）の中で強化され助長されるのに対して、不理解の当惑にあっては認識能力は抑制され麻痺すること）においてどんな認識も無関心・無感動ではない。そこでは私は認識者として認識対象の上にあり、またそうあるべきである[7]。

また、認識おける主客間の影響関係の必然性についてこう断言している。

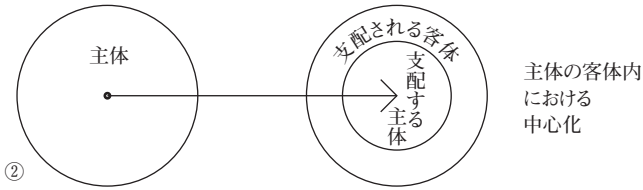
完成されたものにあってはどんな認識も他の作用の影響を受けないものはない。所謂、空想は本来的な意味で無から出た思念である[8]。

このようにカントの美的判断の根拠を認識の問題一般に敷衍させるという条件つきではあるが、バアダーは、認識行為において関心と感動が不可欠であり、またそれらによる認識主体と客体の間の影響関係が必然的であるとし、カントの見解を明確に批判している。そしてその論証として彼独自の神秘主義に由来すると思われる理論を提示する。以下、彼の主張を引用しながら、概略図を付して解説してゆく。

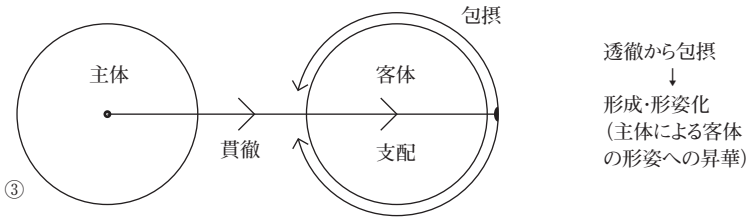
①単に承認するのではなく、狭義の意味において私が認識しようとするもの、透徹し（durchdrinden）、捕捉し（erfassen）、見通し（durchschauen）、究明しようとする（ergründen）ものを言葉の物理的・力動的な意味において内的に求めるのである[9]。



②つまりそれは中心もしくは中核となることである。中心とはどこでもより高いもの、中心をとりまくものはより低いものであるから、対象を私の力の下、支配下に置くことである[10)]。



③あらゆる透徹はそれが完成すれば包摂（Umgreifen）となる。また、まさにそれゆえに形成（Bilden）、形姿（Gestalten）となる。結果、そのように透徹される客体が主体としての「貫徹するもの」（Eindringende）・「透徹するもの」（Durchdringende）の中へと高められ、形姿を得るのである[11)]。



ここで特徴的なことは、認識主体が客体を認識する過程が力動的かつ段階的に捉えられていることである。つまり、認識することは単に客体の存在を承認すること、認知すること（anerkennen）ではなく、主体が客体を掴み、見抜き、突き抜け、その根拠を探ること（ergründen）にある。次の段階として、主体の客体内における中心化がおこる。ここで主体の客体に対する質的な高さが明確となり、前者の後者に対する支配の関係が確立する。主体が客体に突き入って支配した後、認識の最終段階である客体の主体による包摂

がおこる。それは世界の形成（Bilden）、形姿化（Gestalten）へと繋がってゆく。ここにおいてバアダーはカントにはない新たな哲学上の地平を築く。つまり、認識（Erkennen）という行為の一連の段階的な物理的・力動的展開によって、認識主体が客体を「見る」という行為が認識主体による客体の「創る」という行為をも含みもつこと、換言すれば、「見ること」と「創造すること」の同一性が提示されていることである。われわれはこれを認識論の存在論への引き戻しと理解すべきであろうか、それとも認識論と存在論の総合と理解すべきであろうか。この関連についてバアダーは J. ベーメ（1575－1624）の文体をもって語っている。

> 生殖衝動と認識衝動の同一性はよりいっそう明らかである。というのも、より高いものがより低いものを根拠づけるために、つまり太陽が地球を、男が女を根拠づけるように、その根拠、その担い手となるために、それを把握するために、その内的存在となるために、より高いものがより低いものに対する、また中へと向かう努力（Imagieren）、この努力、本来この努力こそが栄誉・名誉・形姿をもってするのと同じように同一物をもって、同一物を通して自らを讃え、自らを飾ることである。これら三つの語は実際、古い言語においても同義語である。そこでは女は男の形姿であり、名誉である。アダムが神の形姿であり、名誉であるように[12)]。

ここにおそらくカントが夢にも思わなかったであろう、認識行為と生殖行為の理論的同一性が神秘主義思想の中で高らかに謳われている。

2．バアダーとユダヤの神秘思想「カバラ」

旧約聖書「創世記」には神が世界創造をした過程が描かれているが、バアダーの所謂「段階的認識論」はどこか「創世記」の記述を彷彿させるものがある。「創世記」では神が己の鏡像を見ようと水に覆われた闇の世界の中に

光を導き、昼と夜を分けることによって世界創造が始まる。神は大地と水・空・獣・諸生物、そして己の似姿としての人間アダムを土塊から造る。この間わずか六日の仕事である。その後、神は一日の休息を置いて世界創造の仕上げにかかる。大地の東方にエデンの園を造り、そこにアダムを置く。園の中央に生命の木と善悪の知恵の木を据え、神の天地創造の象徴とする。エデンの園から川が流れ、それは世界の全ての川の源となる。「創世記」では、このようにして世界の原型が創造される。

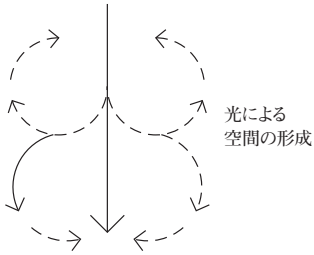
バアダーの段階的認識論では、この「創世記」にある光が闇の空虚を貫き、世界が創造される段階を思わせるが、古代ユダヤの神話の中にはもっと明確な形で世界創造が段階的に語られているものがある。古代ユダヤの神秘思想「カバラ」[13]では、神は己の姿を見ようと欲して世界創造に着手する。そこで「絶対無」（エイン）であり、かつ「絶対全」（エイン・ソフ）である神が空虚の中に一条の光を差し込む。光は創造の十段階（セフィロト）を経て世界の具体像を造ってゆく。この十の段階（ケテル［神的属性の位階は王冠］、以下、同箇所は同じ位階を表す）・ホクマー［知恵］・ビナー［理解］・ヘセド［慈悲・偉大］・ゲヴラー［公正・強大］・ティレフェト［美］・ネツァー［永遠・勝利］・ホド［反響・栄光］・イエソド［基礎］・マルクト［王国］）を経て完成した神の鏡像としての自己の似姿を見た神は、それに満足し、その後、今度は一転して世界空間を収縮し、「空虚」によって再び世界を消し去り「無」に帰せしめる[14]。この十の世界創造の段階はマクロコスモスとしての宇宙とミクロコスモスとしての人間の形姿を象徴的にかつ同時に世界の諸相と営為のアレゴリーとして描く要素として提示される。「カバラ」の「世界流出説」ではこのような光による世界の創造と消去の過程が展開されている。

①

そこでは、創造の端緒に神としての光の流出（Emanatio）が起こる。光は下方の虚空へと降りて行く。世界創造の第一段階である[15]。

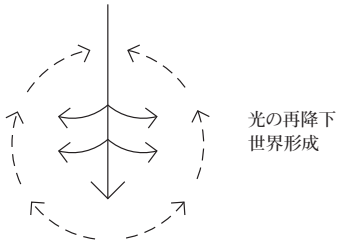
②

光はやがて虚空の中心に達すると自らを抑制し、中心から引き離れてそれを取り囲む空虚の縁へと引き寄せられる。その中心の周りには虚空な空間と真空が残される。この抑制は空虚な中心を均一に取り囲むので、空間は空虚で、均一な円形に形造られる。ここが流出物と創造物が存在する場所、つまり宇宙となる。



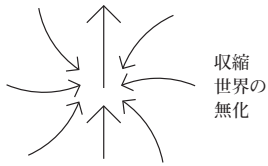
③

宇宙の枠が造られると、もう一度、神の無限の光から一本の光の筋が垂れ下がり、宇宙の空間の中に降りてくる。神はその光の筋を通して、セフィロトの十の段階を経て世界の全てを生み出し、創造し、形成する。



④

神は自己の似姿としての世界を完成し、それを見て満足すると、今度は一転して今までの創造の過程と全く逆の方向と過程を辿って世界をまたもとの無に帰せしめる。



このようにバアダーの認識論の構図と「カバラ」の「流出説」の構図はきわめて類似しているが、これは彼がJ.ベーメ（1575－1624）やS.マルタン（1743－1804）の研究を通して「カバラ」の世界創造説を獲得した成果であるものと思われる。バアダーのベーメに関する講義録の中には「カバラ」の術語を用いている箇所が処々に見られる。これは当時、カントの観念論がドイツの思想界を圧倒的な影響力でもって支配していた状況への反動の一例と言える。実際、後期ロマン派の思想家は一般にカントに批判的な立場をとっており、その際、彼らの思想の拠り所は多く古代インドやユダヤの神秘主義思想に求められた。自己の哲学思想の根幹においてユダヤの神秘主義思想に依拠したシェリングもまた反カント思想の旗手の一人と言えよう。実際、彼の哲学の方向性は、常に主観主義の否定、主客対立の否定にあった。その思想的地平はバアダーと軌を一にしている。

3．バアダーとシェリングの同一哲学

バアダーがカントの美学的判断の論理を根拠としてカントの認識論を批判したのは前述した。カントの認識論では主体と客体の間に関心（Interesse）、感情の移入（Afficieren）といった主観的な要素の排除を前提とした、客観へと通じる確かな主観的な態度・洞察がその問題の核心であったが、バアダーは主体の客体に対する物理的・力動的作用（Affection）こそが世界認識の基本構造であり、それはまさに客体の中に主体を発現させる創造行為でもあるとした。バアダーは前述したように生殖衝動と認識衝動を同一のものと考えた。

> 生殖衝動と生産衝動の同一性はいっそう明らかだ。（中略）精神はひたすら他者と自己の肉体を求める。肉体はひたすら他者と自己の精神を求める。と言うのも、精神は自己が存在し、自己を感じ、その中で成長の喜びに没頭する自己の肉体を求める以外の何ものをも自らの活動としな

いからである。その成長を通して精神は自己を形成し、自己に形姿を与え、自己を讃えるのである[16]。

バアダーはカントやベーメの用語を駆使して認識行為と生殖行為の論理的同一性を説く。彼の思想の背景には恐らく、erkennen についての知見とそれをめぐる言語哲学の営みがあるものと思われる。というのも「創世記」第四章のアダムとイヴが結ばれる場面にあるように、「対象を知る」（erkennen）ということは「男が女と交わる」（erkennen）ということをも意味するからである。ルター訳「創世記」にはこうある。

「アダムは妻エヴァを知った（erkannte；erkennen の過去形）。彼女は身ごもってカインを生んだ、」（第四章１）
「カインは妻を知った（erkannte）。彼女は身ごもってエノクを生んだ。」（第四章17）
「再びアダムは妻を知った（erkannte）。彼女は男の子を産み、セトと名づけた。」（第四章25）

中高ドイツ語の erkennen には「男女の交わり」の意味が既に付与されているが、古高ドイツ語の irkennen にそのような意味を確認することは出来ない。どのような経緯でこの語がかかる意味を獲得したかは定かでないが、erkennen に相当するヘブライ語の jada には「知覚」や「知覚・熟考によって得られた洞察」だけでなく「人間の交わり」という意味がある。そこから「男女の性的な交わり」、「人間の神への従順な態度」という意味が派生した[17]。ルターが「創世記」の訳出にあたって使用した erkennen は、バアダーによって聖書というヨーロッパ文化の始原的な地平で哲学的な意味を付与され、より豊かで壮大な規模の表象を獲得する。

生殖力・生殖欲が両性的であるように、認識欲もまた両性的である。と

いうのも、われわれはいたるところで「より高いもの」の能動的なイマーギーレン（Imagieren）に「より劣ったもの」の受動的なイマギーレンが呼応するのを見るからである[18)]。

（認識行為）のこのような内在・つかみ込み・内的形式は当然、常に「快感」（Genuss oder Lustgebend，カントは Wohlgefühl を使っている、著者記す）を伴う。ちょうどそのように認識されたもの、いわば器・取っ手としての形式によって把握されたものに対する力がその形式によって可変的であるように[19)]。

このように、認識行為と生殖の論理的同一性をその言語分析から導出することによって、バアダーの認識論はカントのものにはない飛躍的な力動性を獲得し、加えてユダヤ思想の形而上学とエロスの精神がそこに加味する。ここにおいてバアダーの思想はその発展的な展開の余地を十全に開示し、シェリングの同一哲学に直接的な影響を及ぼすこととなる。

A. トレプトゥは、バアダーの思想をとらえて認識行為と創造行為の同一性は、詩人や芸術家の創造行為の中に典型的に見られるとしている。

芸術家の認識（形成）過程と生の創造過程を比較すれば、認識と創造の関係がいっそはっきりしてくるだろう。両者の過程は魔術的（magisch）である。人間が造り、作用すもの全てを彼は自己の心像（Bild）に従って造る。この像（現実になるべき理念）は何よりもまず快（Lust）の契機を伴った魔術的幻視（magische Vision）もしくは「生きていない像」（unlebhafte Figur）として現れるのがわかる。快は意志（Wille）を刺激しながら作用し、それによって「想像」（Einbildung）あるいは「内的形成」（innere Bildung）として「心象」（Geistbild）への、「生きた（しかしまだ肉化していない）理念」（lebhafte, noch nicht leibhafte Idee）への

発展・形成が始まる。この意志の形象形成能力こそがあらゆる詩人や芸術家を霊感を得た「験者」（Seher）とする[20]。

芸術家の認識と物質的創造は同じ魔術的な法則に則っている。魔術の光の中に、強いて言えば、創造的欲求・欲望（Begierde）の光の中に認識と創造は共通の根拠を持っている[21]。

トレプトゥはバアダーの哲学の基本概念である「生殖行為（Zeugung）」を「生の創造過程（Erzeugungsprozess des Lebens）」と意味づけ、さらに芸術的創造行為の発動源として「快の契機を伴った魔術的幻視」を提起した。それは G. フロイトの精神分析の根幹概念であるリビドー（libido）を想起させる。ここでは認識行為・生殖・性的衝動・生産・芸術行為などあらゆる人間の意志行為が渾然一体となって働いている。

このように認識行為と生殖行為の同一性、及び芸術におけるその調和的統一性について論が及ぶ時、われわれはバアダーの思想に深い影響を与えたと言われるシェリングの同一哲学について語らねばならない。なぜなら、彼こそは精神と自然のその根底における同一性という新プラトン派以来の中心テーマに取り組み、そして謂わばそのコプラとして芸術の役割を提唱し、芸術による両者の昇華と調和的統一を体系的に説いた哲学者であるからだ。彼はロマン派の思想家らしく神秘主義とカント哲学の双方の地平に立脚している。

神とは同一性の側面からみられた宇宙であり、”全て”である。というのも、神は唯一実在的なものであり、その外部には何ものをも存在しないからである[22]。

芸術はそれ自体、絶対者の流出である[23]。

宇宙は神の内に絶対的な芸術作品として存在し、永遠の美という姿をとって形姿化されている[24)]。

シェリングは、神による流出を契機とする世界創造とその段階的な形姿化というカバラの思想を基礎に、神の世界創造の最終目的として芸術の創造を提起している。さらに第二段階として、芸術における精神（人間の絶対的自由）と物質（自然）における調和的統一というシェリング哲学の一大テーマ、つまり同一哲学を基礎づける。

芸術において絶対的自由から最高の統一と合法則性が生み出されるのであり、芸術こそは自然よりもはるかに直接的にわれわれ自身の精神の驚異をわれわれに認識させてくれるのである[25)]。

実在的全体と観念的全体の絶対的同一性は必然的に原像としての美、つまり絶対的な美それ自体である。そしてその限りにおいて、神の内なる宇宙もまた絶対的美術作品とみなすことができる[26)]。

ここに至って世界の霊性（精神）が自然の根底（Urgrund）にあって、いまだ未分化のまま混沌（Caos）状態にあったものが芸術によって精神が絶対的自由を獲得し、物性と最高の統一をなし、同時にカントの言う合目的性ならぬ合法則性を獲得する。

バアダーの提出したZeugung（生殖・生産）は自然の営為であり、kennen（認識）は自我の意識的行為である。その際、erkennen（認識する、交わる）は双方の要素を包含し、統一する意味領域にある。

シェリングは彼に要請されたより認識論的な理論展開の立場から、バアダーのテーマにアプローチした。芸術において初めて自然と人間精神はそれらを同根とする物性から完全に開放され調和的完成の域に達する。芸術は世

界と自我（人間精神）、現実と理想、自然の意識的部分と無意識的部分が完全な調和の中で発現する領域である。その際、単に理論的な手法ではこの調和を見出すことは出来ない。と言うのも、シェリングにとって哲学とは、芸術とともに手を携えながら神への奉仕を内面的に実行する“秘儀”なのである。

注

1) Kant, Immanuel : Kants Werke. Dritter Band (Kritik der reinen Vernunft). Unveränderter photomechanischer Abdruck von *Kants gesammelte Schriften.* Hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Walter de Gruyter & Co. Berlin 1968, S.16.
2) Vgl. Kant, Immanuel : *Kants Werk*. Vierter Band (Kritik der Urteilkraft). S.223.
3) Vgl. Kant, Immanuel : *Kants Werke*. Dritter Band (Kritik der reinen Vernunft). S.65ff.
4) Vgl. Kant, Immanuel : *Kants Werke*. Dritter Band (Kritik der reinen Vernunft). S.144.
5) Goethe, Johhan Wolfgang von : *Eckermanns Gespräche mit Goethe* : In dem letzten Jahren seines Lebens. Hrsg. von Christoph Michel. Deutsche Klassiker Verlag. Frankfurt a.M. 1999 S.234.
6) Novalis : *Novalis Schriften*. Erster Band. Hrsg. von J. Minor. Verlegt bei Eugen Diederichs. Jena 1923 S.26ff.
7) Baader, Franz Xavier : *Sämmtliche Werke*, Erster Band. Hrsg. von Franz Hoffmann. Verlag von Hermann Bethmann. Leipzich 1851 S.42ff.
8) Baader : a.a.O., S.51.
9) Baader : a.a.O., S.42.
10) Baader : ebda.
11) Baader : ebda.
12) Baader : a.a.O., S.44ff.
13) 古代ユダヤの神秘思想。主に神の創造行為に関する記述の総称である。9 世紀から 13 世紀の間に成立。『ユダヤ神秘主義』（G. ショーレム著　山下肇他訳　法政大学出版局叢書ウニベルタシス所収、1985 年）、『ユダヤの秘儀』（セヴ・ベン・シモン・ハレヴィ著　大沼忠弘訳　平凡社、1982 年）を参照されたい。
14) ハレヴィ前掲書、15-18 頁参照。
15) 同上書 19-23 頁参照。
16) Baader : a.a.O., S.44ff.
17) Nach “Die Bibel nach der Übersetzung Marin Luthers mit Apokryphen” Hrsg. von der Evangelischen Kirchen in Deutschland und vom Bund der Evangelischen Kirchen in DDR. Deutsche Bibelgesellschaft. Stuttgart 1984, S.6.

18) Baader : a.a.O., S.44ff.
19) Baader : a.a.O., S.42ff.
20) Treptow, Alfred : *“Erkennen” Versuch einer Deutung der Grundidee in Goethes “Urfaust” und Clemens Brentanos “Romanzen vom Rosenkranz”*. Dissertation der Hohen Philosophischen Fakultät der Albertus-Universität zu Königsberg. 1931, S.78ff.
21) Treptow : a.a.O., S.81.
22) Schelling : Friedrich Wilhelm Joseph von : *Ausgewählte Schriften*, Zwieter Band. Hrsg. von Manfred Frank. Suhrkamp Frankfurt a.M. 2003 S.194. 訳出にあたっては『同一哲学と芸術哲学』（「シェリング著作集 3」所収、小田部胤久・西村清和訳、燈影社、2006年）を参考にした。
23) Schelling : a.a.O., S.200.
24) Schelling : a.a.O., S.213.
25) Schelling : a.a.O., S.185ff.
26) Schelling : a.a.O., S.213.